

長野県植物研究者伝 9

横内 斎 抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama : Biography of Mr. Itsuki Yokouchi

長野県に生まれ、明治44年(1911)から昭和37年(1962)まで県内の学校・研究所等に勤務し、県内をくまなく踏査し、異常な熱心さをもって県内の植物を調査し、尚退職後も引き続いて研究調査を重ね約70年間にわたって主として長野県内の植物を研究した異色の研究家に、横内斎氏がある。

氏の履歴の概要は、次の通りである。

1895(明治28)年東筑摩郡会田村(現四賀村)に父新吾、母なかの長男として生まれる。

1905(明治38)年 10才、会田小学校高等科1年生の時から2年間藤旗甚七先生の教えをうけ、植物に興味を持つ。(当時尋常科は4年制)

1910(明治43)年 15才、松本教育実業学校に学び、ここで岡田邦松先生(1874~1918)に40週(40時間)生物学の指導をうけ、自然科学の教養をうける。岡田邦松氏は下伊那郡喬木村の出身で、1914(大正3)年塩見岳でタカネマンテマ(*Melandryum apetalum* Fenzl)を日本ではじめて発見した人であり、この植物には牧野富太郎氏が *M. apetalum forma okadai* Makino の学名を与えている。また昭和戦前の国定の小学国語読本の「白馬岳登山の話」も岡田氏の登山記録であるという。

1911(明治44)年 16才、南安曇郡小倉小学校准訓導として小学校の教員となる。

その後、諏訪郡泉野小学校、立沢小学校、岡谷小学校、上伊那郡南箕輪小学校、西筑摩郡(現木曽郡)駒ヶ根小学校、福島小学校、南安曇郡有明小学校、下高井郡平穂小学校、松本市旭町小学校、東筑摩郡五常小学校、中川小学校等につとめ、各地の山野を踏破し、植物の研究をする。

1944(昭和19)年 長野県立松本工業学校(現松本工業高等学校)に勤務。

1945(昭和20)年、50才、京都大学 木曽生物学研究所に勤務、1962(昭和37)年まで勤続。

1950(昭和25)年 55才、長野県立公園審議委員。

1962(昭和37)年 67才、皇太子殿下並びに同妃殿下を志賀高原で御案内。

1964(昭和39)年 69才、天皇・皇后両陛下を聖高原八幡大池で御案内。

1968(昭和43)年 73才、脳卒中発病、40日間入院治療。病氣軽快後植物の調査執筆を続ける。

1980(昭和55)年 85才、病没。

氏は小学校卒業時の校長手塚縫藏氏の感化をうけ、正義・自由・平等の思想を堅持し、酒も煙草もたしなまなかった。

青年時代は主として矢沢米三郎(1868~1942)氏・河野齡藏(1865~1939)氏等の指導を受け、1920年代からは主として小泉秀雄(1886~1945)氏の指導をうけ、後年には水島正美(1925~1972)氏や前川文夫(1908~1984)氏の指導をうけている。

氏は、長野県内の高山はほとんどことごとく踏査し、また小泉秀雄氏とともに北海道の大雪山の調査に同行し、なお木曽生物学研究所勤務の17年間には京都大学の上野益三氏を中心とする陸水学の調査研究にも加わり、長野県内並びに東北地方の山地の湖沼等の調査にも研究の場をひろげ、陸水昆虫のアイダクロカワゲラ・ヨコウチトビケラ等の新種も発見している。

約70年間の氏の植物調査の結果発見した新植物には、新変種として、次のものがある。

1953年飯山市斑尾山産のオクノサワフタギ(*Paulownia chinensis* var. *terrae-nivosae* Mizushima)

1961年下水内郡栄村和山産のコシジドコロ(*Dioscorea septemloba* var. *platyphylla* Mizushima)。

1973年美ヶ原産のウツクシシャジン(*Adenophora nikoensis* var. *recurvata* F. Maekawa)。

これらの外に、品種・間種合わせて約80の新植物を発見している。

氏の著作にかかる主なものは、次の通りである。

1952(昭和27)年 信濃の植物。

1956(昭和31)年 下水内郡植物誌 水島正美氏と共著。

1957(昭和32)年 日本中央アルプス植物誌。

1959(昭和34)年 日本南アルプス寒地植物誌。

1962(昭和37)年 下水内植物地理。

1966(昭和41)年 信濃の湖沼。

1968(昭和43)年 菅平植物誌 長野県業務課と共著。

1971(昭和46)年 長野県の植物。

1976(昭和51)年 長野県植物分布の由来。

1979(昭和54)年 信濃の植物分布区系。

1980(昭和55)年 山野巡歴。新信濃の植物。

1983 (昭和58) 年 信濃植物誌。

この最後の「信濃植物誌」は、氏の没後残された4000余枚の原稿を4人の子息が協力して整理編集されたものであり、その資料となる標本約25000点は、信州大学へ寄贈されている。

氏は青年時代、1926年から1930年にかけて、植物同好会を主宰し、雑誌「植物雑誌」を通巻18冊発行している。この雑誌に投稿している方々には、次の

ような方々がある。(順不同)

小泉秀雄、笹岡冬彦、杉本順一、横内斎、矢沢米三郎、上伊那郡自然資料調査委員、村松光喜、小林喬樹、大井一夫、須山千萬蔵、河野齡蔵等。

参 考 文 献

前記の1952年から1983年までの氏の著書。

前記の「植物雑誌」通巻14～18冊。

清水敏一著 大雪山わが山小泉秀雄。

〔新刊紹介〕清水建美「原色(新)日本高山植物図鑑」(Ⅱ) A5判 395頁、保育社(1983)、4800円。

長野県植物研究会会長である清水建美先生は1982年「原色新日本高山植物図鑑(Ⅰ)」を発行された。図鑑は旧来の高山植物図鑑とは趣をかえた新著であるため、植物研究家のもとより、山草愛好家、登山者等幅広い読者があり、Ⅱ巻が待たれていました。先生は長野県植物誌作成のために一日の半分以上は標本室で標本を整理されたり、指導に当られ、また3回に渡る渡米や東南アジアへの植物調査等非常に忙しい毎日であったが、持ちまへの頑張りや夜遅くまで植物の生品や標本を検討され、新しい事実即した図鑑が1983年11月発行されました。植物研究会員一同心から喜び申し上げます。

本書の内容はユキノシタ科からミクリ科までの被子植物227種、裸子植物10種、シダ植物27種、計、264種がカラーで収録され、近縁種を含む400種が解説されています。特にイグサ科、カヤツリグサ科、イネ科は生態写真はもとより、細部にわたっては線画により特徴をとらえて図示されていて、読者にはまたとない親切な解説書です。著者の植物に対する深い愛情と熱意が感じられます。従って(Ⅰ)・(Ⅱ)巻あわせてカラー487種、近縁種を含めると835種が収録されているので日本の高山植物はもとより北アメリカを含めて外国産の高山植物を調べるのにも役立つものと確信します。本書にはシロバナツルコケモモ、キタヨツバシオガマ、シロウマノガリヤス等初めて発表される植物や新学名が68種が収録されていて、植物の研究には欠かせない内容をもっています。

その他では、基準標本の産地、現在までに発表された植物の染色体数、各植物の生活形、分布、種ごとに植物地理学的な要素区分、19種1変種の地下部の図化と解説、英文検索表等多方面にわたった研究書であるために読んでいても新しい事実をうる事ができる楽しい図鑑です。(松田行雄)

〔新刊紹介〕横内 斎「信濃植物誌」A5判 401頁、信濃植物誌刊行会発行(1983)、4,500円。

長野県は植物が豊富な県であるから、誰しもが一冊にまとまった植物誌の出現を待ち望んでいたに違いない。勿論、長野県全体の植物誌的なものは、杉本順一氏の「長野県植物総目録」(1963～66)があるが、既に古いし現在入手すること至難である。しかし、南北に長く、高山が多く、したがって谷や川も多い信州の本格的植物誌作成となると、一人の力では到底手に負えるものではない。ところが、横内斎氏は単独でこの仕事に取組まれた。氏の植物研究歴は、1911年に教職に就かれた頃から1980年に亡くなられる迄ほぼ70年に及び、その間、切角集めた標本が木曽福島町の大火で灰燼に帰してしまったにもかかわらず、美しい信州に生をうけた著者の誇りと粘り強さをもって、更に一層努力され、多数の新植物を含む膨大な植物標本と文献資料を集められた。その結果、「信濃の植物」、「長野県植物分布の由来」、「信濃の植物分布区系」、「新信濃の植物」など数多くの著作を重ねられて、信州の植物区系成立過程を明らかにされて行った。後年、不幸にして病に倒れたが、それにもめげず、氏のライフ・ワーク「信濃植物誌」の執筆を続けられて、約4,000枚の原稿にまとめられ、後一步という所で、1980年9月13日ついに帰らぬ人となられてしまった。その後、御息達の連携ブレイドで最新の資料が追加され、ついに「信濃植物誌」を世に送り出した。本書中、「Ⅲ、植物分布区系」は氏の分布論の集大成であり、「Ⅳ、信濃産高等植物の総目録と分布型」は御自身の豊富な標本と文献によってまとめられたものである。膨大な資料を比較的短期間に整理された関係上、属の大きさが同じ科の中でも不統一な場合もあるが、現在の長野県の唯一のまとまった植物誌として、日本の植物学に貢献すること絶大である。なお、横内氏の標本は遺族の方々の御厚意で一括信大に寄贈され、信大腊葉室(SHIN)で保存・管理されている。

(H. T.)